

● シリーズ 私の見た日本 Vol.236

付近の現実と向き合って、ポジティブな行動から建築へ

李 橋 (リ キョウ)

1990年 中国瀋陽省出身。2009年から日本に留学。
2017年 名古屋大学卒業。2021年まで日建設計
設計部門にて勤務。現在、東京大学 建築意匠博士
課程に所属。2024年からさいたま市大成町二丁目
自治会 広報部部長を務める。



名古屋大学での卒業設計を思い返すと、建築設計に至るアプローチはとても貴重な経験だった。組織事務所の勤務期間では、なかなかそのようなアプローチが応用された場面を見たことがないが、自分の設計活動で展開してみたいと思っている。当時、片木研究室に所属しており、必ずよく知っている地域から卒業設計の敷地を選定しなければいけなかった。実際の設計が始まるまでに、着目した地域に関する調査・分析がたくさん必要とされた。地域の文脈を把握してから、地域の課題を見極め、そして素直な建築の提案をするアプローチが叩き込まれた。与えられた主題に基づいて設計したり、施主から提示された要望に応じて設計を行うことは、確かに従来の設計業務のあり方である。一方で、率直に地域の現状と向き合い、その文脈から建築の必要性和可能性を検討することも重要であり、そうした方がより切実な

問題に届くのではないと思う。日建設計にいる間、AAスクールを卒業した同僚にスタジオ・プロジェクトのことを聞いてみたら、やはり建築提案以前の調査・分析が重視されているとのことだった。名古屋大学や東京大学などの教育機関では、自ら地域を調査した研究成果を設計課題に応用するのは一般的にあったが、設計の現場では、このようなアプローチが軽視されることが多い。もちろん業務として成立にくい部分はあるが、何らかの形でやってみたいと思っている。

修士の頃に、イギリスのキングス・クロスのアーバンデザインを研究し、地域活動によるまちづくりの検討事例を知った。同時期に名古屋大学で行われた西村浩氏の講演を聞き、いつか地域に密着する建築活動をしたと思うようになった。そして博士時代に、坂茂氏の事務所

でアルバイトをする時、商店街に散らばっている坂氏の事務所と作品を見て、その思いはもっと確かめられたような気がした。就職のために名古屋から大宮へ引っ越して以来、常に地域のことを調査し、可能な行動を取っていく中で、徐々に自分が住む大成町二丁目から展開する可能性を探っている。

妻が持ち家の購入を考えていた時、私たちは予算内の限られた選択肢の中から、大宮駅から徒歩20分で、近くに豊かな緑に囲まれた普門院という寺がある一戸建て（写真1）を選んだ。普門院は、日本の近代化の先駆者である小栗上野介の菩提寺であり、昔の大成村は小栗家の領地だったことを、今年

の地域活動から学んだ。ここの住宅地の一戸建てに住むまでに、中国では高層マンション、日本ではアパートや市営住宅に住んできたので、日本の建築家に提唱された集落的な空間を時間をかけて体験したことがなかった。ここに住んで4年が経ち、横文彦氏いわく「群造形」の中に身を置いている感覚が芽生える一方で、この住宅地の現実をより深く読み取る機会も得られるようになった。

大成町二丁目は、30年前までにまだ農地がたくさんある地域であり、昔から住んでいる高齢の住民は多いが、住宅地の発展の時間軸で見ると、町自体はまだ若く、未熟な部分がある。現今の町を見ると（写真2、3）、ばらつきが大きい印象を受け、対立を感じたりもする。広い駐車場が道路に隣接する商業施設は郊外的であるが、都心部に見られるオフィスや集合住宅の開発もある。代々地主だった家の屋敷は非常に立派である一方で、土地売買で小さく分割された住宅も少なくない。「鉄道のまち」というスローガンでイメージを主張する大宮とはいえ、住宅地エリアは非常に車に依存している。月極駐車場はたくさんあるが、道路は狭く、歩行者と車両の距離は近い。このような風景は大成町二丁目だけではなく、埼玉全域にお

いて普遍的に見えるのであろう。単純な利益指向によって町が形成されていると批判してもいいかもしれないが、自由な基調を持つ町と、その地域文化の持続性を大事にするために、向き合うべき課題を探し、ポジティブな行動を取ってみている。

2年前から大成町二丁目自治会の役員になり、自治会・広報部の部長を務めながら、地域の改善に少しずつ取り組んでいる。日本の自治会の加入率が低下していることを承知した上で、あえて向き合ってみようとした。役員になったばかりの頃は、やはり自治会の体制や活動に多くの問題点が見受けられたが、ポジティブな行動を取れば、いくらでもよくなるだろうと思って続けてきている。最初のごみ置き場の整備や区編成の調整といった作業から始めたが、地域住民からは確かな感謝の声が寄せられ、作業を重ねるうちに、コミュニティの小さな界

限を理解することもできた。その後、アルミ缶回収で汚れた自治会館の屋外空間（写真4）を清掃・管理したり、誰も使わない自治会館の部屋を片づけて活動拠点にしたり、自治会館に隣接する公園の雑草を取ったりすることもできるようになった。自治会館と公園といった地域施設の維持管理から始めば、空間のリノベーションを望む地域住民の声も聞こえるようになる。そして、今年から広報部において建築班が設立され、町の研究活動や町空間の提案活動に取り組んでいくつもりである。自治会だよりを通じてこれらの内容を配信し、地域の方々との交流を広げ、町空間の改善が少しずつ検討されるようになったらいいなと考える。

まちづくりの活動を続けていくと、やはり同じようにまちづくりに熱心な地域のベテランと出会うことができる。普門院の歴史を知る地域の方々は、今年初めての試みとして、小栗家

や普門院の歴史に関する講演活動やレジャーイベントを計画している。これらのイベントをきっかけとして、普門院をもっと開放的な地域空間にすることも考案されているようで、その実現に向かって、ぜひ自分の力を注ぎたい。

現代の私たちは、遠方にある何かに目を向けがちで、自分の「付近」を当たり前のものとして受け止め、大事にしないことが多い。近隣がいるようでないような感覚は、外国人特有のものかと思っていたが、日本人も同じように感じているようだ。しかし、この「付近」は私たちの生活を支える大事な環境であり、そこに大事にすべき人がいて、大事にすべき町がある。建築を志す人たちは自らの行動を通じ、「付近」を培う方法を検討していく必要があると思う。自分の活動はどこにたどり着くのかはわからないが、行動しながら可能性を探り、続けていきたいと思う。



写真1：自宅の向こうに見える普門院側の緑



左／写真2：国道沿いの町の様子 右上／写真3：自治会館から眺望した町 右下／写真4：自治会館と公園の間の屋外空間

